

# いちごセル成型苗の生育特性

## 1. 試験のねらい

いちごのセル成型苗の収量は慣行苗よりわずかに少ないが、2、3月の収量が多くなり中休みが軽減され、生育は慣行苗とほぼ同様で、省力性の高い育苗方法であることをこれまでに明らかにした。今回はセル成型苗の生育特性について検討した。

## 2. 試験方法

女峰を供試し、葉数 2.1 枚程度の苗を 7 月 20 日に採苗し、セル成型苗区（セル区）は容量 130 ml の円筒形セルへ、対照区は 12 cm ポットへ仮植し、セル区は窒素成分で株当たり 20 mg、対照区は 70 mg 施用した。夜冷処理は 8 月 24 日から 9 月 13 日まで行い、9 月 14 日に 2 条高畝ベツトに定植、10 月 16 日に保温を開始し、管理は慣行に準じて行った。調査は出葉間隔（1 枚の葉が出葉してから次の葉が出葉するまでの期間）、第 3 葉の葉柄長、葉面積、開花日、腋芽数、頂花房の収量について行った。なお、葉面積は生葉数の関係から 9 月 19 日の調査では第 1 葉から第 3 葉、10 月 19 日では第 5 葉、11 月 20 日以降では 6 葉までの合計とし、次式により算出した。

$$y=1.161+0.585x \quad r=0.995^{**} \quad (x: \text{葉身長と葉幅の積})$$

## 3. 試験結果及び考察

- (1) 育苗期におけるセル区の出葉間隔は対照区より長く、夜冷処理開始後は極端に長くなり、育苗中に発生した葉数は対照区より 1.3 枚少なかった。定植後は両区とも出葉間隔が著しく短縮したが、セル区ではこの傾向がさらに強くなり、11 月 20 日まで展葉が促進された。
- (2) 第 1 次腋花房の葉は両区とも 10 月 19 日に認められ、11 月 20 日には全ての葉が展開した。葉数はセル区が 1.0 枚多かった。第 2 次腋花房はセル区がやや遅れて発生したが、その後両区とも順調に葉を展開し、定植後から 1 月 29 日までに発生した総葉数はセル区 9.2 枚、対照区 8.6 枚でありセル区の方が 0.6 枚多かった。
- (3) 定植後の葉柄長はいずれの区も 12 月 9 日まで徐々に増加し、10 月 19 日から 11 月 29 日まではセル区の方がわずかに短かかったが、12 月上中旬ではほぼ同様となった。葉面積は 11 月 20 日の調査時に両区とも最大となったが、明らかな差はみられず同様な推移であった。
- (4) 頂、腋花房とも開花日に差がなく、腋花房ではセル区のぼらつきが小さく、着花数及び腋芽数は明らかにセル区が少なかった。収量、一果重には差が認められなかったが、屑果の発生率はセル区が少なく優れた。

## 4. 成果の要約

セル成型苗の出葉間隔は定植後から 11 月中下旬までポット苗よりわずかに短く推移し、総出葉数、葉面積及び葉柄長は大差ないことが明かとなった。定植時まではセル成型苗が小さかったことを考えれば、本ぼでの生育はポット苗よりやや優れると思われた。また、頂花房収量や一果重は同様であったが、セル成型苗は屑果の発生が軽減されたため、生産効率の向上が図れるものと考えられた。これらから、セル成型苗の栽培管理は慣行法に準じてよいと思われた。

(担当者 栃木分場 石原良行)

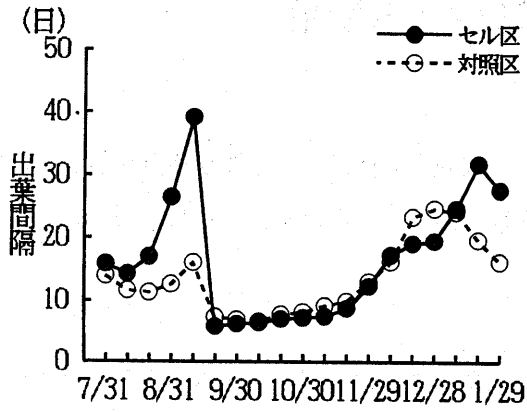


図-1 出葉間隔の推移

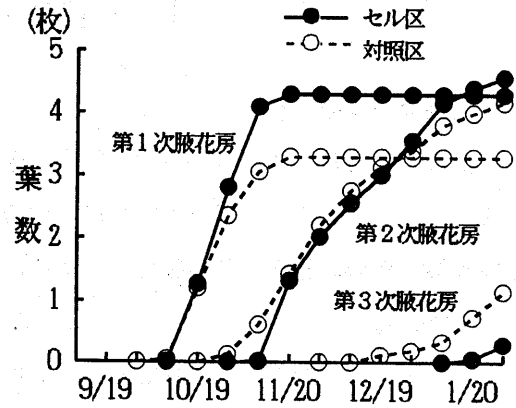


図-2 花房別葉数の推移

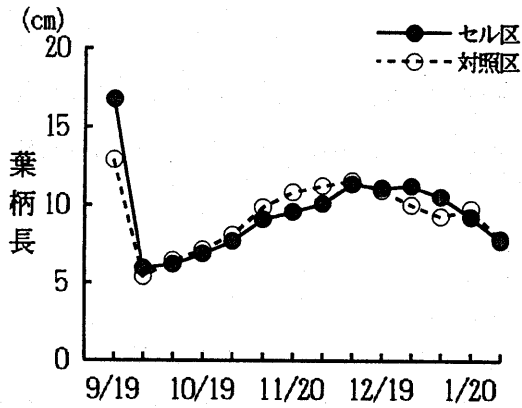


図-3 葉柄長の推移

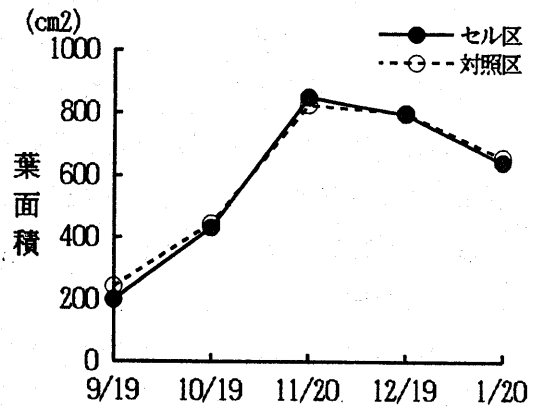


図-4 葉面積の推移

表-1 開花日、着花数、収量性

試験区	開花日(月・日)		頂花房 着花数 (花/株)	第1次 腋芽数 (芽/株)	花芽 収量 分化 <sup>2)</sup> (g/株)	一果重 (g)	可販 果数 <sup>3)</sup> (果/株)	屑果率 (%)	
	頂花房	腋花房							
セル区	10.24(1) <sup>1)</sup>	11.29(2)	18.8(1.3)	1.4(0.2)	1.4	160	11.6	13.8	26.6
対照区	10.22(1)	11.24(7)	22.5(1.4)	2.0(0.0)	2.6	166	12.1	13.7	39.1

注. 1) ( )内の数字は5%信頼限界

2) 1:肥厚期、2:分化期、3:花房分化期(9月10日調査)

3) 6g以上の果実.